

信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について

君嶋泰明

本論文は、20世紀ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー（1889-1976）の初期思想が、表立って無神論を標榜していながら、実際には彼自身の信仰に基づいているというゆえんを明らかにしたものである。

筆者はこれまで、主著『存在と時間』（1927）以前の時期の講義録等の読解を通じて、ハイデガーの思想形成の解明を主たる目的とした研究を行ってきた。本論文はその主要な成果の一つである。具体的には、本論文は、講義「アウグスティヌスと新プラトン主義」（1921）の解釈を通じて、ハイデガーの理解するアウグスティヌスの信仰のあり方と、ハイデガー自身が哲学を行おうとするさいの姿勢が、ある意味では重なり合っていることを示した。そしてそのことに基づき、この時期のハイデガーの哲学が、見かけとは異なり、彼自身の信仰に根ざしているといいうることを指摘した。以下にその概要を手短に述べる。

保守的なカトリック教徒として青年期を過ごしたハイデガーは、プロテスタントのエルフリーデ・ペトリとの結婚を機に、カトリシズムのシステムに縛られない、自由な信仰のあり方を模索するようになる。そしてその結果、彼は哲学研究と教育に打ち込むことこそが、自分に定められた信仰のあり方だと考えるようになる。彼はその思想形成の出発点において、信仰を棄ててではなく、信仰ゆえに哲学を選んでいたのである。

他方、ハイデガーの理解する哲学者の生とは、自分自身の実存に、そしてそれのみに立脚しようとする生である。それゆえ彼にとって哲学は、原則的に神について何かを語る資格をもたない、その意味では「無神論的」たらざるをえないものであった。

しかしこの哲学は信仰と十分に両立しうる。そのことは、上述の講義におけるハイデガーによるアウグスティヌス『告白』第10巻の解釈を読み解くことで見えてくる。講義でハイデガーが追跡しているのは、自分は神と一体になることへと向けて造られていると信じるアウグスティヌスが、神が定めた通りに自分の実存をあらうとする、悪戦苦闘の歩みである。そしてそのなかで、ハイデガーは最終的に次のことを確認している。

そうした歩みの末にアウグスティヌスが直面することになったのは、自分が真っ直ぐに神へと向かって実存することの不可能性（別のものに「よろこび」を見いだしそちらの方へと逸れてしまうことの必然性）である。神によって定められた自分の実存に立脚しようとすることは、最終的に神との間の乗り越え不可能な隔たりの自覚に至るのである。しかしながら、それと同時にアウグスティヌスは、そのように神と一体になるという望みが完全に断たれるに至ってはじめて、そのようなみじめな自分にたいする神のあわれみを感じることができるようになったとも語っている。それゆえアウグスティヌスに従うなら、自分の実存に立脚しようとし、結果的に神との間の隔たりを自覚するに至ることは、かえってそうすることによってはじめて可能となるような、神のそばに立つことを意味しうる。したがって、この時期のハイデガーの、自分の実存に立脚しようとする「無神論的」哲学も、それ自体信仰に基づいたものでありうるのである。